

長崎の農山村における地域活動の実践的支援に向けた研究方法の構築と展開

研究年度 令和2年度

研究期間 平成30年度～令和2年度

研究代表者名 寺床幸雄

I はじめに

本研究は、現地調査と長期的な地域統計資料の検討および地域間比較分析に基づき、長崎県の農業をはじめとした地域産業の持続における可能性と地域的課題を明らかにすることを目的とする。長崎県は、離島や中山間地域、傾斜地農業地域を多く含み、地理的多様性を内包している。長崎県での事例研究を行うことで、日本の他の研究分野（社会学、農学）だけでなく他の先進国の社会科学に対しても、農業や地域生活の持続に関する先進的な知見を提供できると考えられる。さらに、地域との継続的な関わりの中で発見した課題について、実践的に支援しつつ解決を目指し、長崎から社会全体に向けて農山村の地域課題解決の方法を示す。

II 研究内容

本研究は、長崎県の農業をめぐる地域的多様性を把握するためのデータ分析と、現地調査による実態把握を行い、現地の地域活動への関わりを通じた実践的支援方法の検討を目指す。データ分析では、農業のミクロレベルでの地域的差異を把握するために、農業集落カードを活用した分析を行う。また、地域の社会的属性の把握のために、国勢調査の調査区別集計のデータを収集・分析し、農業の分析との統合を図る。さらに、具体的なフィールドワークの実践をふまえ、農山村の変化を多角的に把握し、地域支援の方法を検討する。

III 研究成果

今年度は3年計画の3年目であり、追加のフィールドワークをふまえて研究のまとめを行う予定であった。しかし新型コロナウイルス感染症対策の影響で農山村でのフィールドワークはほぼ実施できなくなり、計画を変更することとなった。具体的には、予定していたフィールドワークに代わって文献調査と方法論的検討を充実させた。ま

た、感染状況が落ち着いた11月に五島市奈留島をはじめ県内の数か所で簡単な調査を行った。奈留島の調査では、既存の集落の分布と人口の変化を把握したうえで、現地観察と地域の状況についての聞き取りを実施した。さらに、農業集落カードおよび自治体提供の小地域統計の分析と地図化によって、農山村の変化の多角的把握を行った。

文献調査では、農山村を取り巻く変化を理解するための方法論の検討を国内および英語圏の文献を参照して行った。人口減少等によって社会集団や地域活動にも変化が生じている一方で、情報通信技術の活用や新たな人的つながりの形成などにより、地域づくりには多様な方向性が考えられる。特に、地域住民の主体性を尊重しつつ、地域外アクターとの持続的な協調関係が構築されることが重要である。なお、先行研究の検討のうち2019年の研究動向をまとめた記事が『人文地理』の学会展望に掲載された（寺床2020）。

これまでのフィールドワークをふまえると、地域的文脈を考慮した地域活動の位置づけの理解と、それをふまえた実践的支援のあり方の検討が重要である。農業の経済的・社会的位置づけや生業活動のパターンなどは、地域によって状況が異なる。さらに、長崎県の場合は離島や傾斜地地域など多様な地域条件も考慮する必要がある。

たとえば、大学が学生を主体として地域活動に関わる場合、地域条件および地域のニーズの把握を十分に行ったうえで、学生の学びと貢献の場を創出しなければならない。中川（2019）で示されている多様な大学の実践もふまえつつ、地域的文脈および学生の学びの特性を考慮したフィールドワークを継続して行うことが、地域の実践的支援にもつながると考える。

IV おわりに

本研究では、長崎県の農山村の実態の理解と、それをふまえた地域支援のあり方を検討した。最終年度に十分なフィールドワークが行えなかったこともあり、十分な実証的な検討ができたとは言い難い状況である。一方で、今年度のような社会状況は、地域活動や地域内外の関係を再考するよいきっかけともなった。地域を理解するためのフィールドワークとそれをふまえた地域連携や地域支援の検討は、継続的な活動と関係性の構築により実現される。これまで関わった地域での調査や地域活動への参加を継続しつつ、地域の変化をとらえた実践的研究を今後も蓄積していきたい。

参考文献

寺床幸雄（2020）2019年学会展望 村落. 『人文地理』第72巻、第3号、253-256頁。

中川秀一（2019）「関係人口」からみた大学教育における地域フィールドワーク. 『経済地理学年報』第65巻、第1号、1-9頁。